

2014年11月6日



第61号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生

その55

サナンさん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.



サナン・チュサクンさんが住むイサーンと呼ばれる東北タイは、今から約200年前、ランサーン三国（現ラオス）やその一つのビエンチャン王国とシャム（現タイ）との戦火のなか、ラオスから、当時未開の土地だったイサーンに流れ出てきた人々から形成されている。元々は、中国雲南地域に住んでいたタイ族が、八世紀以降にいまのタイやラオスのある地域に南下したことに端を発する。

そのイサーンは、タイで最も貧しい地域と言われ、出稼ぎ者として外に流れ出て行く人も多いが、そこには感性豊かな魅力ある人たちが集まる。実験村とも親しい関係にある生きるための歌（社会派ソング）を歌うスースーバンドやその先駆者であるカラワンバンド、イサーンが誇る農民リーダーのバムルン・カヨターさん、他にも多くの活動家や詩人も輩出している。

サナンさんもその魅力ある人の1人だが、イサーンには珍しく、タイ南部の出身だ。1959年生まれ。両親は、椰子農園を営み、その8人兄弟の5番目の子として生まれ、他の兄弟は全て女の子だったため、お母さんにとっても可愛がられて育てられたようだ。彼の一目おとりとしたかのようにみえる雰囲気は、そのた

めだろう。10歳年上のお姉さんが学校の先生だった影響で、幼少時分から勉学に関心を持った。

彼が中学1年のときに10月14日の政変が起きる。1963年から続くタノーム首相、プラパート副首相の軍事独裁政権への不満は、民主化運動となってあらわれた。

73年10月14日、民主化の舞台となったバンコクのラーチャダムヌン通りでは、政府と市民が衝突、政府軍による無差別の銃弾によって何十人もの市民が命を落とすことになった。しかし、その後タノーム、プラパートは国外に逃亡し、民主化運動側の勝利に終わった。そんな影響から政治に関心を抱き、なんと中学の時からタイの名門タマサート大学の政治学部に行くことを決めていたようだ。

タマサート大学では、活発に学生運動に携わった。卒業後、大手出版社に勤務したが、1年で退社、大学で知り合った彼女の出身地であるイサーンに移り住み、地域開発や農民運動、メコン川の河川流域の自然保護活動等に取り組んでいる。

機関紙や雑誌の編集者としても卓越した能力を発揮し、社会派のコラムニストとしても知られる。何冊もの著書を持つ中、いくつかの小説も描き、2008年には、東南アジア文学賞（S.E.A Write Award）の最終選考に彼の作品『タイ無限会社』（マティジョン／2007）が残った。

流民を懐広く受けとめるイサーンの大地によって、サナンさんの秀逸した感性が開花し、彼は、その恩恵をイサーンの社会活動に身を捧げることで返している。イサーンの歴史に名を残す人物となった。

*今回サナンさんは、日本財団アジア・フェロシップ（APIフェロシップ）から研究予算を得て5月～7月にかけて来日。アジア農民交流センター（AFEC）が受け入れ先となり、帰国前の最後の2日間、実験村の仲間たちと交流した。

松尾康範

ダーチャ訪問記

(ロシアの市民農園)

石井恒司

ある思いがあり、ダーチャを見学に行った。極東の町・ロシアのウラジオストク。成田から2時間弱の、行ってみると近いロシアだった。地理的には、アジアの圏内だが、町並みも人もロシア系だった。

「ダーチャ」。聞き慣れない言葉。私も最近までは知らずにいた。同じもので「クラインガルデン」というものがある。ドイツの別荘に畑の付いたもので、週末や夏休みに行って、野菜や果樹を栽培する。ロシアではそれをダーチャという。



私は農の形態に興味があり、3月に行ったジンバブエでは、弱小農家といえども、広いところでは8ヘクタール、豊かな所だと2ヘクタールと、いずれも個人経営の、牛に鋤を引かせるという厳しい自給的農業だった。それと、イギリスの植民地だったので、化学肥料や農薬を中心とする一区画一種の数ヘクタールの円形の灌漑農業だった。

ロシアの農民のやる農業ではない、都市生活者の耕す畑ダーチャ。1アール〜2アールと小さいながらも、週末や夏休みに来て栽培する、自給を中心とする農の形だった。しかしながら、ロシアで消費されるジャガイモの80%はこのダーチャで生産されているとガイドブックや人づてには聞いている。

今回、8名のメンバーでダーチャを訪れた。最初に車窓に写った光景は、広いロシアだった。地理的にロシアの南に位置するので、畑地帯が

想像されたが、行けども行けども広い道路と森林、広野ばかり。畑は行き帰りとも一枚も見ることにはなかった。

ウラジオストクの空港を離れて1時間ほど行くと、ダーチャらしき小屋と畑が見えてきた。ガイドさんに「これがダーチャ？」と聞くと、そうだと答えた。ガイドさん日本語ぺらぺら、まあ良かったこと！

ウラジオストク郊外の山麓、林の中へとマイクローバスは国道からそれて無舗装の砂利だらけの道へと。あちこちに点々と山林を切り開いた土地。そこに家と畑が点在していた。しかし、このダーチャ村はけっこう立派な家が多い。来る途中に見えたダーチャ村は、小さな5〜6坪の家と1〜2畝程度の畑のダーチャが多かったように見えた。どうもここは金持ちの住むダーチャらしい。

ダーチャのオーナーは、ゲネレーダさん77歳、女性、衣類メーカーの社長さん。ダーチャは日本人の旅行者が泊まるためにあるわけではないので、普通8人もの旅行者が泊まれるところはない。旅行会社をお願いして8人でも泊まれるダーチャを探してもらったら、金持ちの所に来てしまった。ゲネレーダさんはひと夏に14組ほどの訪問者を受け入れているという。



広いといっても、全敷地2000㎡、レンガ造りの2階建て、室数7〜8、トイレ2箇所、その上に屋根裏部屋が1つ。これが敷地の中央にドンとあった。その右手に食事用の屋外片

屋根、下にテーブルとイスがあった。その手前右手の斜面にバラ、けいとう、百日草……日本でもよく見られる夏の花が所狭しと植えられていた。よく管理された花畑。この夏用に植えられたと見られるが、花の種類がわからないのが残念だった。



肝心の野菜畑はというと、家の前、左手から母屋の横から家の裏側へとぐるりと家を取りまく様に野菜畑があった。左の塀のふちには、ブドウが塀を這っている。そして野菜は高さ30センチ、幅2メートル、奥行き5メートルほどの小石まじりの枠区画のベットにあった。トマトが1メートルほどの支柱に30センチおきに20〜30本植えられていた。通路をはさんで隣のベットには、ピーマン、とうがらし、キャベツが少しずつ植わっていた。その横には寒さよけに使っていたと思う高さ60センチ×幅150センチのビニール造りの防寒用の小屋の屋根が開いていて、そこには実が見えないほどぎっしりとピーマンが植えられていた。

またその隣には、ガラス温室。幅4メートル×高さ2.5メートル×7メートルほどの中には、もうすでに収穫があらかた終わったキュウリがぶらさがっていた。温室中央部分にはトマトが大事に植わっていた。温室の裏側、隣には木イチゴの実が真っ赤になっていた。北側の一番奥の塀のふちには、リンゴ、プラムの果樹、母屋の左手、作業小屋、貯蔵庫、サルナシが並んでいた。さらにその右手奥にはガチョウが小屋の中でガアガアと5羽ほど。

こんな感じで所狭しと植えられてはいるが、実によく配置を考えて野菜や果樹が栽培されている。

しかし、またよく見ると、キャベツは身長が50センチもあり、しかも下葉はもぎ取られ、ヤシの木みたいになっていた。その下葉はガチョウ小屋でエサになっていた。キャベツは割れもせず、この夏中収穫期らしい。ただしちょっと堅い。ロシアではトマトが一番人気だそう。栽培は屋外にもかかわらず、割れもせず、少々枯葉はあるが、赤や黄に熟していた。驚くことに1本1本のトマトの実がみんな形が違っていた！ オーナーに「トマトは何種類くらいあるんですか」と聞いたとき、「いっぱいある」としか答えなかった訳がわかった。たぶん、種用に1個のトマトをとっておくと、20種ものトマトが出るのではないかと。ちなみにダーチャは自家採種が基本らしい。

この他作られている野菜はニンジン、カボチャ、ズッキーニ、チシャ、大根、ジャガイモ、ナス、など。スイカ、メロンはなかったので、生活に必要な実用的な野菜畑であったように思う。一家族が生活するのに1〜2アールの畑があれば自給できるんだなという確証が得られたダーチャの旅だった。



追伸

ただ、私の思いとはうらはらに、ロシアの若者にダーチャ離れが起きている。スーパーに行けばジャガイモに限らず、あらゆる野菜や果物、乳製品、肉、輸入品なども所狭しと並んでいる。ロシアでもお金があれば何でも手に入るグローバルな時代になっている様だ。ロシアが育て上げたダーチャ。どのような変遷をナスのか！

危うさを内包した巨大過ぎるモザンビーク開発計画ープロサバンナ

近藤康男

今年8月、インド洋に面する南部アフリカの国モザンビークを訪ねた。プロサバンナの現地調査と関連の国際会議参加に加え、日本農業と新たな“フードレジーム（食料・農業の構造）”について話をする機会があった。

“フードレジーム”の話にどのように日本の農業を噛み合わせようか、と考えているうちに、どうも、家族農業中心のアジア・アフリカは日本も含め、同じような農業政策がとられ、農業・農村・農民は同じような困難に直面しつつあるのではないかと思うようになった。農業投資と農地収奪が今日的な問題となっている地域でもある。

それは、輸入自由化、農地の集積、商品作物の導入、輸出志向、外国あるいは農業外からの投資を中心とした政策であり、それがもたらすものは家族農業・小規模農業・地域へのしわ寄せである。安倍政権が声高に叫んでいる政策に散りばめられた言葉そのものでもある。

モザンビークと日本、瓜二つではないか？

遠く離れたモザンビークと日本それぞれの農業において、基本的には同じことが進行している。違うのは、資金の豊富な日本は国内の農外企業から、一方資金不足のモザンビークでは資金が海外から流れている点である。

日本は、11年からモザンビーク北部のナカラ港と内陸の資源地帯を結ぶ「ナカラ回廊経済開発戦略プロジェクト」を開始、本年1月訪問した安倍首相は5年間で700億円の資金供与（円借款含む）を表明し、生活道路・生活路線とは無縁の石炭など資源輸出のための輸送インフラの整備が進められている。そしてこれに先行して始まっているのが、09年9月に合意された「日本・ブラジル・モザンビーク三角協力による熱帯サバンナ農業開発プログラム」（プロサバンナ）である。

プロサバンナは、ブラジル型の農業をモザンビークに適用し、輸出志向の大規模商品作物生産を進めようとするブラジルのリーダーシップが発揮された、対象地域1600万haという、平均1.3haの家族農業が500万haの耕地を耕しているという器には不釣り合いなほど巨大な計画である。

軌道修正した筈のプロサバンナ、現場で起きている現実は何？！

情報開示と農民との対話のないまま進められようとしたこの計画にモザンビークの農民団体、日本・ブラジルの市民団体からの批判が高まり、日本政府・JICAは、国会でも市民団体との定期的協議の場でもここ1年以上、「プロサバンナは家族農業を育成する目的である」「現地での対話と情報開示に取り組む」との発言を繰り返すようになった。

そこで我々も13年、そして今年の夏と現地調査に入ることとなったのである。しかし、そこで聞いた農民団体・市民団体の声は、「我々の質問には全く答えない対話」であり、「プロサバンナとは何であり、今何が行われているかの情報開示もなく」「しかし現場では色々な動きが進んで」おり「プロサバンナとの関連は分からないが、適切な補償もないまま農地収奪と農業投資が進んでいる」という声であった。他方でモザンビーク政府は「海外からの農業投資を積極的に進める」と表明し、ブラジル主体の大規模農場志向の進展である。

投資やインフラ整備、輸出を一概に否定するものではないが、このような大規模プロジェクトは必然的に海外からの投資を誘発し、家族農業と地域にしわ寄せをもたらすものである。そして日本政府やJICAの「無秩序な大規模開発を野放しにはしない」という主張とは裏腹に、ブラジル型の計画が着々と進められている。

耕地：永年牧草地除く	モザンビーク	日本	
耕地面積	520万ha	425万ha	11年（農水省海外農業情報）
農家戸数	360万戸	146万戸	モザンビーク08年、日本は13年販売農家
平均耕地面積	1.3ha	2.12ha	同上

森づくりへのおさそい

北総大地夕立計画 平野靖識

毎月第3の土曜日か日曜日に、芝山町小寒田^{こかんた}の夕立の森で、樵仕事に軽い汗を流している。篠ダケやアズマネザサ、ヤブカラシと大格闘したのもずいぶん昔のこと、いまは林内にそよぐ風と鳥の声を楽しみながら、お茶と弁当にゆっくり時間をとって、その合間に作業を進めている。いま取り組んでいるのはお隣の菅沢さんのスギ林の掃除。境界から4列目、5列目にさしかっている。10月18日の作業日には木の根ペンションの冬のストーブ用に薪の切り出しもした。次の予定は11月15日、里山の秋を味わいに来てください。

欲をかくとろくなことがない

麦大豆畑トラスト 金森史明

いま、畑では大豆が育っているところです。7月5日に種まきをしてその10日後には発芽もしていました。よしよし、なんて思っていたのも束の間、あれよあれよという間に雑草が生えてきて畑を覆ってしまいました。今年は収量を伸ばすぞと思って大豆の種まき前に肥料分の多い堆肥を施用したために例年以上に雑草が伸びてしまったのであります。

9月10月に草とり（というよりは草抜き）を実施し、大豆畑なのか雑草畑なのかわからなくなってしまった畑をトラスト会員のみなさまと一緒に大豆畑になんとか戻すことができました。が、やはり大豆の生育は芳しくなく、収量も少なそうです。トホホ。

11月には麦の種まきをやります。これまでは大豆と一緒に栽培していましたが、草がヒドイため今年は別々の畑で栽培してみることにしました。

いろいろと失敗もやらかしてはおりますが、これからもみなさまと一緒にがんばっていきたいと思っています。

ご参加、お待ちしております！

実験村の麦・大豆が

お味噌になっています

麦・大豆畑トラストで作った麦と大豆を原料にした米味噌・麦みそが三里塚わんぱくと(有)三里塚物産で商品化されています。糀に使用したお米も実験村会員で地元お百姓の石井恒司さんの無農薬米です。オール実験村製。オール無農薬・無化学肥料の原料です。

三里塚わんぱく 0476 (73) 3973

米みそ 800g 800円

麦みそ「麦秋」800g 850円

(有)三里塚物産 0476 (32) 0424

米味噌「糀味噌」1kg 850円



実験村相談会に参加して

先日実験村の相談会に参加させていただきました。僕は小学生の頃からhiphopやレゲエなどの社会的メッセージの強い音楽やカウンターカルチャーのブラックミュージックを好んで聞いていたので、国家権力や多数派の思想や哲学に巻かれず、個人や少数派の意思を突き通した先輩たちの活動に興味があり、ちょっと遠いけど実験村の相談会に参加することにしました。

会は昔の水源地調査の話や、土の凝固剤に反対する運動の話、水脈の問題など水についての話などとても興味深いものでした。一度会は終わり今度は酒場で交流会と言う事で、酒も入りさらに深い話が聞けました、人が意思を貫く時の代償の話、平和の話、フェラクティやボブマーリーを彷彿させる体験談、どれも貴重な話でした。

相談会に参加して、先人達が革命や反対運動で築いた過去の知恵は、今後、革命や反対運動から日々の営みへ、そして小さな一人一人の選択でさらに進化すると思います。貴重な体験談を聞かせていただきありがとうございました。

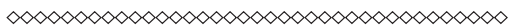
堀内祐治

タイの農村で学ぶインターンシップ

現地の事情に沿った地域開発を学んできたい

はじめまして。日本国際ボランティアセンター（JVC）の第14期タイ農村インターン生の、岡田佳子と申します。

先日、樋ヶ守男さんから、三里塚にて空港建設をめぐる闘争のお話を聞かせていただいた折に、当事業（タイの農村で学ぶインターンシップ）を「地球的課題の実験村」の会報で紹介していただけるとお聞きしました。私なりにこのインターンに寄せる思いを文章にしましたので、寄稿させていただきます。 ↗



麦・大豆のレシピ（その2）

西沢江美子

【乾めん】

- ①トラストの全粒粉で作った茶色の乾めんは、ゆでたりしないで、そのまま味噌仕立てで野菜たっぷりの汁で煮込みうどんが最高です。
- ②ゆでてスパゲティ風、あるいは焼きうどんにしてもいい。ありあわせの野菜をたっぷり入れてください。

【大豆の水煮】

- 大豆は豊富なたんぱく質や9種類の必須アミノ酸、食物繊維、ミネラル、ビタミン類が含まれている。どんどん食べよう。以下、作り方。
- ①きれいに洗い、一晩水につけておく。
 - ②大豆の2倍ほどの水で煮る。
 - ③途中で豆を指でつまみ、つぶれるくらいになったら火をとめる。
 - ④柔らかくなるまでは、水が減ってきたらお湯をさす。
 - ⑤よくさまして、1回使う分だけ袋に煮汁ごと入れ、冷凍しておく。
 - ⑥必要な時の取り出し、煮豆にしたりカレーに入れたり、豆ご飯にしたり。

わたしは現在、大学でタイ語と東南アジア経済について勉強しています。これから約半年間、このプログラムに参加し、東北タイで地域開発について学びます。

元々、開発援助に興味があり、東南アジアと日本を結びたいという思いでタイ語を専攻しました。しかしODAや開発援助についての文献を読み進めるうちに、利権問題や環境破壊など、多くの功罪が生まれていることを知りました。開発はいったい誰の為なのか、何故開発をするのか… 根本から考え直したいと思ったのが、このプログラムに参加する動機でした。

このインターンでは東北タイの農村に滞在し、同時に現地NGOの方に随行することで、タイの智慧に沿った地域開発の在り方を学んで来たいと思っています。

アルバイトで貯めたお金を使い果たし、大学を休学して参加するので、ただで帰るわけには行きません。お世話になっているJVCの方々や、三里塚の方々への感謝を忘れず、最後まで頑張ります。



トラストの大豆を…

ふと、ラジオから「玄米と大豆の炊込みご飯」と若い女性料理研究家の声流れた。ふ〜ん、麦大豆畑トラストの大豆があるし、山形の菅野さんの玄米もあるし、やってみました。

玄米が2合に大豆が一握み（7〜80粒）、ちよいと洗って、ひと晩（6時間以上）水に浸けておく。炊くときの水は多め（玄米だけ炊くときの1.2〜3倍）。あとは玄米を炊く要領。土鍋なら、やや強火で10分ぐらいで沸騰、あとはとろ火で40分ぐらい、そして10分蒸らす。仕上げに塩昆布と煎り黒胡麻を混ぜ込んで出来上がり。

白い？ 黄色い？ 茶色い？ お赤飯のようです。朝飯とお弁当と、2・3日おきに炊いています。

山下茂

宇沢弘文さんを悼んで

成田市東峰在住 実験村村民 樋ヶ守男

実験村の生みの親の一人、宇沢弘文さんがこの9月18日、86歳で逝去された。

ノーベル経済学賞候補にもあがっていた宇沢さんが三里塚の私たちの前に現れたのは1991年春。「成田空港問題の原因を究明し、その現状を明らかにし、あわせて、社会正義に適った解決の途を見出すことを目的とする調査団」（通称隅谷調査団）の一員としてだった。調査団は成田空港問題シンポジウムと同円卓会議を通して、政府側の強権的空港建設の非を明らかにし、その謝罪と共に土地収用法の適用を断念させた。そして、強制的手段を排し地域住民との共生をはかり、話し合いの中で空港建設整備をはかるといふ解決への途を大きく開かれた。そこで農民側が提起した「地球的課題の実験村」構想は、宇沢さんを座長とする「同具体化検討委員会」に引き継がれた。3年後の98年5月、検討報告『若い世代へー農の世界から地球の未来を考える』で実験村運動への提案がなされた。成田空港問題を超えて、「農的価値をものさしに、自らの自由を律するという地球的課題に挑戦する」地球的課題の実験村が誕生し、その年の秋から活動が開始されたのだ。

その間、宇沢さんの考えの核心に社会的共通資本があった。「社会的共通資本は、一つの国ないし特定の地域に住むすべての人々が、ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を持続的、安定的に維持するような社会装置」である。それは「大気や山川湖沼、海洋、土壌などの自然環境と、道路や交通機関、上下水道、電力・ガスなどの社会的インフラストラクチャー、そして教育や医療、司法、金融などの制度資本」から成り立っている。またそれらは「人間が人間らしい生活を営むために、決して、市場的基準によって支配されてはならないし、また官僚的基準によって運営されてはならない」。

宇沢さんが言う自然環境は、人も含めそこにいる動植物や微生物、その生命活動の蓄積を含んでいる。その地球大のエコシステム、いわば

「グローバルネットワーク・オブ・ライフ」の中で、どの人も生まれ生きることができる。また、どの人も世界中の生きとし生きるものとながっている。宇沢さんは、人間特有の「経済学」ゆえに、自然環境と人間特有の生命活動が生むものを一体的に社会的共通資本と呼ぶ。そして一人一人がその主体的構成者として生きてゆくことで、皆が人間らしく生きようと提起されたのだった。

温暖化、森林の減少、土壌の砂漠化、海洋と大気の汚染、原発や放射性物質の堆積、飢餓と社会的貧困の拡大、そして戦争… 市場原理主義が跋扈するグローバリズムは、生命や皆のものであるはずのものを例外なく商品化する。皆の生命の場をどんどん貧しくし、格差と極点化社会を広げてゆく。いま成田でも空港の経済性最大化が至上命題とされ、便数の増大や夜間飛行時間の延長、採算度外視の第3滑走路案、多額債務による「大学」誘致ー「東京と成田市だけの医療特区」などなど。生命の安売りと中央従属が「政策」を競っている。が、民衆が自治自立を求め「グローバルネットワーク・オブ・ライフ」の中に人間らしく生き続けようとするかぎり、各地、各領域で社会的共通資本という考え方との対話ー実践がなされるだろう。重い病をえてもなおTPP反対の論陣の中心におられた方だ。宇沢さんにはこれからもゆっくりお休みしてはいただけそうもない。

宇沢さんが何度も訪れ議論された木の根ペンションで、いま私たちは月に一度の「めだか大学」を開講している。参加者一人一人が、「生命・地域にかかわること」の中で自分のテーマを決めて研究発表し、自由に話し合う。（数ヶ月先の）今度の私の時には、宇沢さんの近作『経済学は人びとを幸福にできるか』をテキストにしたい。この本の巻頭には池上彰氏が「格差を、原発を、豊かさを、宇沢先生ならどう考えるだろうか」との解説が寄せられている。宇沢さん本人や「成田空港問題」を知らない若者たちも含めて、宇沢経済学をおおいに語り合いたいものだ。

宇沢先生、永年の御厚誼に深く感謝します。そして、今後ともよろしくご教授願います。 合掌。

図書紹介

ノーサイド 成田闘争 最後になった社会党オルグ

桑折勇一著
崙書房出版発行 1200円(税別)

本書は、桑折勇一氏が、加瀬勉さんから三里塚闘争の聞き書きをまとめたものです。つまり、加瀬勉さんが語る三里塚闘争史であり、まことに秀逸で貴重な文献といえると思います。心から、著者の桑折氏、そして出版の機会を提供された「崙書房出版株式会社」(本社・千葉県流山市)に感謝を申し上げます。

タイトルにあえて苦言を申し上げるならば、「ノーサイド」はいただけません。著者がどう思っているにせよ、成田闘争はいまだ進行中の闘争であり、そのことは加瀬勉さんの言にも、現実の進行状況からも明らかですから。ジャーナリストであるなら、思い込みによる記述は避けるべきでしょう。

加瀬勉さんからの聞き書きは、本書に収められたものの何十倍にも上っただろうことは想像されます。しかし崙書房出版の「ふるさと文庫」(新書版)の上限200頁という制約もあり、多くのエピソードが割愛されただろうなと思いました。たとえば、反対同盟の分裂(1983年)の前年、フランスのラルザックやフランクフルトなどでの加瀬さん、上坂さん、前田さんを含む反対同盟農民たち一行の国際交流とその後も続くジョゼ・ボベ氏らとの交流活動などがその一例です。そして、この国際交流活動の成果を農民たちから篡奪しようとした支援党派に対する加瀬さんたち農民の闘いが反対同盟の総会へとつながりました。

それでもなお、この本書の発行の意義は大きい。本書に収められた三里塚闘争を縦糸として、まだまだ語り尽くせない加瀬さんの三里塚闘争を織り上げていくことは可能です。まだお読みになっていない方は、最寄りの書店から注文し取寄せて下さい。

“連帯を求めて孤立を恐れず”の精神で戦い続ける加瀬勉さんへ、手紙や電話でメッセージを送る方のために、連絡先を紹介します。

千葉県香取郡多古町牛尾327(〒289-2245)

電話0479-76-2634

加瀬さんは現役農民ですので、田んぼや畑にすることが多いです。また夜8時過ぎの電話はお避け下さい。

(文章：高橋千代司)

活動予定

11月 8日(土)	麦大豆畑トラスト	麦まき
15日(土)	北総大地夕立計画	山仕事
12月	麦大豆畑トラスト	大豆の収穫
12月20日(日)	北総大地夕立計画	山仕事
1月17日(日)	北総大地夕立計画	山仕事
2月	麦大豆畑トラスト	味噌づくり

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身の暮らしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

- 村民費 3000円
- 麦大豆畑トラスト 5000円
- 通信購読のみ 1000円 ※年3回

郵便振替 00140-3-92555

地球的課題の実験村

<問い合わせ>

電話/FAX：0476(26)1654 平野

メール：jikken-mura@jcom.home.ne.jp

URL：http://members2.jcom.home.ne.jp/jikken-mura/

【編集後記】

今年は「天候不順」と言われ、毎年自宅の庭で栽培している八丈島の唐辛子とんがらし＝「しまとん」の生育が悪く、不作の懸念がありました。でも10月の晴天つづきで生育が急回復して例年並の作柄となり、これまで通りお刺身が美味しくいただけると、ほっとしています。

季節は「もう秋」、夕立の森も色付き初めているようです。紅葉狩りがてら、山仕事や麦まきにお出掛け頂ければ幸いです。(K)

■編集・発行／2014年11月6日「地球的課題の実験村」

■購読料／年間1,000円(年3回)

■61号編集担当／佐々木希一・平野靖識

■共同代表／柳川秀夫 千葉県山武郡芝山町香山新田22
大野和興 埼玉県秩父市大宮5734-4